

第五章 「悪」の問題

0. トマスの基本視点

1) 人間の救いに関する神学的考察から究明

神への恩寵、キリストの生涯、十字架の受難、洗礼・・・諸々の秘跡

2) 善そのもの(神)の認識に到達すると

罪の本質に目が開かれ 悪を悪として認識

1. トマスの「悪」認識

1) 存在しているものはすべて善

悪は善の欠如/悪は存在の欠如

2) 害悪・罪悪は「善・存在」に寄生し

蝕み、空虚化し、派生するもの

3) 悪から解放への道→「存在・即・善」に立脚

(VS グノーシス主義、マニ教の「善・悪二元論」)

3. 4. アウグスティヌス(354~430)、ボエティウス(480?~524?)

1) ボエティウスの『哲学の慰め』

(1) 無実の罪→処刑/貴婦人(哲学)との対話

(2) 貴婦人の問い

世界が最高善の神によって創造されたのに なぜ世界に悪が存在するのか

貴婦人の答

神はすべてを為しうる

誰も疑わない

神が為しえないものは虚無である

(4) ボエティウスは「愛は善・存在の欠如」に至っていない

3) アウグスティヌスの『自由意志論』

(1) 神は異端者の中にいた私を

真理の探究のための第一の自由を示してくれた

(2) 悪とは主なる神からの意志の離反である

離反の運動は欠陥的運動である

すべての欠陥は虚無からくる

しかし、虚無は知り得ない

私は(それは虚無だから)知らない

4) 稲垣先生の注釈『創世記』を例に、神秘の受容

6日間の天地創造の後

すべてのものをご覧になった

見よ、それは極めて良かった

神の目に映るすべてが良い

神の目に映るすべてが「善」であり、「悪」は虚無である

5~7. 「悪」の本質と原因に関する形而上学的考察

- 1) より完全・より不完全の差異は
神は段階的秩序を踏む世界秩序を意図
 - 2) 「悪」の本質は、段階的秩序をふむ
世界秩序の光の下で探求されるべき
 - 3) 善である原因が、善である結果を生ぜしめるときに
付随して悪が生ずる
 - 4) 悪の原因である最高悪はあるのか
 - (1) 何ものも自らの本質によって悪ではありえない
 - (2) 悪は必ず善を基体・担い手として存在する
 - (3) 悪は第一原因たり得ない
8. 9. 自由意思と悪徳(罪過の悪)の考察
- 1) 悪は自由意思の「乱用」に起因
 - 2) 人間は自らの行為の第一原因ではないのに
第一原因として振る舞うことによって
悪が起きる
 - 3) トマスはアウグスティヌスに同意
自由意思の悪の選択の原因は
自由意思に存在する欠陥のせい
この欠陥は過失・悪意でなく
神の法と理性に注意をむけることなく
その先の選択へ進むときに付随的に生ずる
- 10～12. トマスの「悪」概念の現代への挑戦
- 1) トマスの基本的理解
罪を犯した者がそれを罪として自覚し罪の克服に立ち向かうためには
罪を真実に悔い改めることが必要であり
そして真実の完全な悔い改め(魂の回心)は
罪の許しを与える神の恩寵の働きによってのみ可能である
 - 2) 神の恩寵を視界に入れた超自然的秩序の中での「罪」理解
 - 3) 罪を悔い改めるとは 単に罪を嘆き悲しみ
罪を嫌って避けようとする働きにとどまらず
罪そのものを「破壊」しようという働きである
そのとき、悔い改めは神の恩寵によるほかありえない
 - 4) しかし、悔い改めが神の恩寵によるのに、
なぜ、人間に悔い改めが必要不可欠なのか
それは、恩寵が、罪人が、「人間であること」を完成するような仕方で
罪の許しの働きを行うように仕向けるからである
 - 5) 恩寵は罪を破壊するものであるが
それは罪人の自由意思を破壊するのではなく
罪人が悔い改めて 自由意思をもって恩寵を受け取り
罪を破壊するものである

1 3. 悪についての二つの補足

1) 罪を赦された者のみが

真実に悔い改めるのであり

悔い改めは神の恩寵(*gratia*)に対する感謝(*gratia*)であり讃美である

2) 罪の赦しは

神に背いていた悪しき意志を神へと転向させ

神に従属する善き意志

つまり徳へと変化させることによって

罪の原因を完全に廃棄して

神の不興・腹立ちが 恩寵・好意(*gratia*)によって置き換えられることである